

安政二年十月二日

おおじしんならびにしゅっかばしよほうがくこさい 大地震並出火場所方角巨細

安政江戸地震の時に出版された大判彩色のかわら版。普通刊行されている江戸図を右へ90度ほど振って描き、江戸の大変を知らせる工夫が凝らされている。「千早振神のしずめし二荒山（ふたさん）ふたたびとだに御代はうごかじ」と刻する。これはもちろん、古今集「千早振神代も聞かず竜田川から紅に水くくるとは」のもじりである。「千早振」は神に掛かる枕詞で荒々しい意があるから、その連想から「二荒山」、二荒神社のある宇都宮城下は戸田因幡守忠明支配だから、とわに→「とだに」となるのだろう。荒れる江戸を鎮めて、とわに安泰の意味を含ませる。あまり、ぴったりとしない連想の環ではあるが。要するに、もはや二度と地震で世の中がひっくり返ることはないだろうという祈りが込められているのである。

さて、本文「上野ご山内上野御山内八宿坊少し崩れ同本坊中堂其外恙なし／同門前丁いたミ多く広小路中程より出火上野町より長者町／至り伊藤松坂角より御成道井上様小笠様御中屋敷／御類焼にて此火中御かち丁にてやけ留る・・・」と始まる被害箇所の書上は延々と同じ調子で続く。江戸市中の建物その他の被害についてはそれなりの信憑性を持っていると推定される。

江戸市中の被害に続けて、「東海道八品川ゆるし／川さき神奈川つよくふるひ金沢／江の島浦賀辺程か谷戸塚八甚しく／小田原辺をかきり也日光道中八宇都宮限り・・・」と江戸周辺の被害を伝え、最後に「町数五千三百七十余丁崩／御屋敷二万四千／六百三十四軒也／寺院八／一万六千二ヶ寺／土蔵八／焼失之分／六千八百戸前／崩る分／七億二万／六千三十／八なり／」とかなり針小棒大な被害数値を上げるが、これはほとんど実際の数の5～6倍以上。犠牲者の数値に至っては「男女／死人之分／十万／九千／七百／三十／余人也」と10倍以上の死者の数を上げる。

なぜ、こうした事実在即さない数値が出るのだ

ろうか。現在では、江戸に住んでいた武士の数全体は正確にはわからない。江戸時代においても江戸住人の正確な数はわからなかったと思われる。理由は、身分制社会の時代には、武士、町人はそれぞれ管轄される組織が異なっていて、全体をひとつの社会として認識するという枠組みがなかったし、その必要もなかったからである。

というわけで、事実在即した数値そのものを社会が共有する時代ではなかったから、正確な数値に関する感覚は上にも下にもなかったといっていよう。今日的な感覚から言えば、信用しがたい内容ということになるが、そう考えてはこうしたかわら版の面白さや社会的役割を見過ごすことになる。この針小棒大な数値こそ、江戸時代の人々がイメージしていた巨大都市江戸の姿なのである。そして、地震の被害の大きさを世の中に伝えようとした数値であった。

「即時御公儀様より／御救御手当被下／かほどの大変に／あふ人々かつして／死すもの一人も／なくまことにまことに／ありがたき御代／といふべし／めでたしめでたしめでたし」こうした大変に対してすぐに幕府から支援策が講じられたから、誰も食事に事欠き、飢えて死ぬようなことはなかったと記して終りとなる。

この結句もまた、江戸時代の出版業の不安定さを表わすものである。かわら版には政治を批判するような表現を探そうとしても見つからない。なぜか。無届出版のかわら版とても、版木の没収、破碎という厳しい統制を受ける恐れが多分にあったから、必ずこうした当代の政治を称える言葉を付け加えることが商売を続ける上で知恵だった。にもかかわらず、安政江戸地震の時には大量に回収った鯨絵が世の中を不穏にする恐れがあると見て、出版禁止、版木没収となった。その数、380に上ったと記録されている。

北原 糸子（神奈川大学 非常勤講師）

場所方角巨細

十月二日



安政二年十月二日大地震並出火場所方角巨細 (50×73.5cm、東京大学地震研究所蔵)

